Japan Association for the Study of School Music Educaitonal PracticeJapan Association for the Study of School Music Educai

総合表現活動のもたらすもの
ー小・中学校における実践事例を通してー

時得紀子

目的

中教審による次期学習指導要領の改訂に伴い，総合的な学習の時間が削減される方向にあって、改めて総合的な学習の時間等とかかわった総合表現活動の実践がもたらす、子どもたちの課題解決力や表現・コミュニケーション力が培われている成果など、意識の向上や多面的な教育効果について検証する。

総合表現活動から、子どもたちが育むことができたと実感している事柄をアンケート調査や作文等から読み取り、思考力・判断力・表現力の育成や言語・共同性の重視とされる改訂のポイントから探求する。

結果

総合表現活動に3年間継続して取り組んだ、附属中学校3年生112名への意識調査結果から、「表現創造科」の学びの意義等についての8項目の質問に対して、肯定的な回答を示した生徒は全項目で85%以上に達しており、自由記述文からは、「コミュニケーション力の向上、仲間との信頼や団結を深めた、自己表現する楽しさを学んだ」などの回答が多くを占めた。6年間の学びを集大成した大手町小学校の卒業記念発表の「創作組曲」に取り組んだ6年生のポートフォリオからも概ね同様の感想文が見られた。

方法

研究の方法として、従来のペーパーテストでは見とれない、児童・生徒の活動プロセスを見とっていく「パフォーマンス評価」(完成作品や創作プロセスにおける実技・実演の評価、観察や対話による評価などの総称を重ねながら考察する方法) 及びポートフォリオを重視しながら学びの成果を探求した[1]。

継続した観察参観により、その視点を踏まえた、生徒への調査項目を作成し、自由記述からの読み取りに努めた。また、児童が創作した歌詞を通じて総合的な学習や教科学習での学びをどのように言葉に託しているかについて、その成果を読み取った。

内容

1. 中学生への意識調査結果から

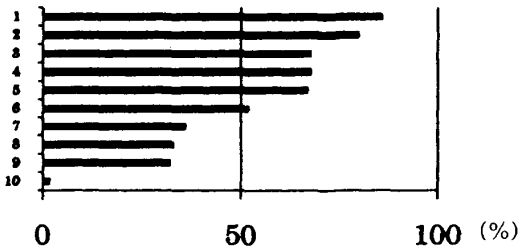
文部科学省研究開発学校として、音楽科と美術科を合科させた、「表現創造科」という独自の教科改編の枠組みに加え、総合的な学習の時間を活用したミュージカル制作に取り組んできた[2]、上越教育大学附属中の生徒を対象として、2002年12月12日にその成果を問う、3年生への意識調査を実施した[3]。

本論では2項目の結果のみ次に掲げる。

問い：ミュージカルの活動で、あなたが特に価値を感じたことは？

1. 舞台練習で仲間と協力しながら進めていくことができた。(112名中86人) 2.「パート別活動」で自分の発想を生かしたり、仲間と協力しながら創作することができた。(80) 3. 配役以外のスポットライトや音響、大道具などの役割を果たすことができた。(68) 4. 役者として舞台に立ち、大勢の前で演技や歌、ダンスをすることができた。(68) 5. ミュージカルの制作と上演全体の中で、仲間の良さを感じ取ることができた。(67) 6. 舞台における演技・音楽・美術・ダンス等の専門性を伸ばすことができた。(52) 7.「シナリオ検討会」の話し合いで「伝えたいテーマ」を考えてシナリオを創作することができた。(36) 8. ミュージカルの制作と上演全体の中で、自分の意見を仲間に伝えながら活動できた。(33) 9. ミュージカルを通して、自分の違う面を発見したり、自分を見つめたりすることができた。(32)

10. その他 (2)



グラフ (問いの結果)

さらに、「今後、総合表現活動が日本の学校教育で実践されるとしたら、小・中学生のためになると思いますか？」という問いに対して、生徒達の自由記述文からは、97%の生徒が肯定しており、ためになると考える理由として約45種類のさまざまな回答が得られた。以下にその一例を挙げる。

「表現の仕方を学ぶことでコミュニケーションがスムーズになり、意思表示しやすくなると思う」「団結できるし思い出になる」「消極的な子も積極的な子も自分の良さを見つけ、自分を周りに出せると思う」「自己表現する素晴らしさや、ミュージカルを成功させる体験を後輩にも知って欲しい」「心を表現しやすくなる」「人

NII-Electronic Library Service

Japan Association for the Study of School Music Educaitonal PracticeJapan Association for the Study of School Music Educai

との協力の大切さを学べる」「言葉の表現、体だけの表現が、これからどんどん必要になると感じる」

このように表現力の向上のみならず、演劇やミュージカルによって付けられる協調性やこれからの社会を生きていく上での大切な力についても、学習体験を経ての生徒達の様々な気付きが見られる。

2. 小学生による創作組曲への取り組み

生活科発祥の地と言われる上越には、地域の題材をテーマとした学習の延長線上に子ども達のさまざまな思いを表現する活動が豊かに育まれてきた長い歴史がある。五感を通した体験を重視し、教科の学びと関連させながら創作活動に取り組む総合表現活動の土壌は、地元の研究先進校などで多くの実践に受け継がれ、今日に生かされている。

その代表的な事例ともいえる、上越市立大手町小学校の生活科と音楽科、あるいは総合的な学習と音楽科の実践は、市内でも取り分け長い年月をかけて今日の取り組みへと育まれてきた[4]。平成18年度卒業記念発表会では、創作組曲「わくわくっ子の歩み

そして未来へ」と題された、同校伝統の6年生によるシュプレヒコールと合唱が披露された。

この舞台発表では、1年生から6年生までの学びの軌跡が児童たちの作詞・作曲でつづられている。6年生55名による作詞の作業の方法は、これまでの学習で書きためてきた学習シートを読み返し、感じたことや考えたことを詩にして行き、何度も推敲を重ねて自分達の思いを込め、共同で制作をして行く。

同校の総合的な学習の時間「ふれあい」において、組曲で表現したい「仲間とのかかわり」「職業」や「食」についての討論会を重ね、組曲に託したいコンセプトを道徳や特別活動の時間の学習においても、さらに学びを深めた。児童による作詞の一部を以下に取り上げる。

『わくわく5年生　ー大きな気づきー』から
大切なことに気づかされたね　もったいないの心
食糧その日　命をいただくことの重みを
深く感じ始めた　完食記録
『わくわく過ごした6年生　わくわくWork』から
さあ始めよう　自分のWORK　働くことに挑戦だ
自分のイメージ実践しよう　そうじに　落書き消し
読み聞かせ　肩もみ　新聞作り　責任もってやろう

個々の子どもの具体的な職業体験を経ているゆえにリアルにイメージされ、歌に込められた思いは自らの言葉として一人一人から発信されている。さらにこの発表会のフィナーレでは、卒業生55名全員が将来就きたい職業をマイクを渡一人ずつ述べた。

「食料その日」にかかわる総合学習、社会科、家庭科での日本の食料事情などの多面的な学びが、歌詞や旋律の表現の工夫に生かされた。子ども達の日々の学習成果の感想文等、ポートフォリオを分析した同校研究紀要からも総合学習や教科等と総合表現活動との関連によって学びの質が向上し、子どもが達成感や自信をより高めていること、学びの意義を理解できるなどの複数の成果が報告されている。

3. まとめと今後の課題

今回の教育改革の学力観である「人間力」はこのような総合的な学びを重視し，その基盤となる世界標準学力である「キー・コンピテンシー」においても知識・技能を問題解決や、異質な集団における理解・交流の相互作用的な道具として用いることの重要性を指摘している。総合表現活動は音楽、絵画、舞踊の創作、作詞等の創造的な活動を含み、こうしたキー・コンピテンシーを培う。

今回の改訂の教育課程全体における重要な核とされる「体験と言葉」についても、本論の事例にみる体験に基づく表現活動を組み込んでこそ、子どもの意欲と創造力の育みを可能にすると捉える[5]。その充実の為にも広義の表現・コミュニケーション力の育成を目指した、学校教育における総合表現活動の評価のための表現尺度の設定が今後の課題となろう。

注・参考文献

1) Gipps, C. V. (1994) *Beyond Testing: Towards a theory of educational assessment*, The Falmer Press.

2) 上越教育大学附属中学校（2006）「人とのコミュニケーションを生かした実践 表現創造科」『新たな単元開発への挑戦ー総合と教科が一体化した単元の魅力ー』東洋館出版社，pp. 104-123

3) 小町谷聖（2008）『学校教育における総合表現活動の考察ー音楽と総合的な学習に着目してー』上越教育大学大学院修士論文

4) 上越市立大手町小学校（2007）『人間力』「食料その日にみられる子どもの姿から」上越市立大手町小学校出版

5) 上越教育大学附属小学校（2007）音楽科における歌舞伎の実践は紙幅の都合上割愛した。今後の継続研究で取り上げたい。

NII-Electronic Library Service